



## コロナ禍におけるイベント開催へのICT活用 ～ 本場大館きりたんぼまつり ～

新型コロナウイルスの流行に収束の兆しが見えない中、3密を避けるなど「新しい生活様式」が求められている。これにともない、本来は人が集まりにぎわいを創り出すイベントでもコロナ禍に対応する新たな工夫が行われている。その一例として、従来の会場・ニプロハチ公ドームでの開催を中止した「本場大館きりたんぼまつり」の取り組みを紹介する。

### 1 コロナ禍とイベント開催

新型コロナウイルスは収束の兆しがみえず、拡大防止策が求められている。これにより本来は人が集まりにぎわいを創り出すイベントは大きな制約が課せられ、困難な状況に直面している。

その一方で、ビジネスの場で人が直接対面しないウェブ会議が急速に浸透したように、音楽や演劇などの舞台芸術においても無観客でのインターネットライブや演奏・上演のネット配信など新しい取り組みが広がっている。またイベントに関しても、コロナ禍にともなう開催中止が相次ぐ中で新たな方法が模索されている。

### 2 きりたんぼまつりのドーム開催中止

きりたんぼをテーマに「文化の継承をALL大館で」をコンセプトとする「本場大館きりたんぼまつり」(以下、「きりたんぼまつり」)は今年で第48回を迎え、10月1日から31日までの会期で開催された。

しかし、今回の開催は昨年までとは大きく変わった点がある。従来行われてきたニプロハチ公ドーム(旧名称「大館樹海ドーム」)を会場とする催しを、新型コロナウイルスの感染拡大防止のために中止したことである。

ドームを会場とする以前、きりたんぼまつりは大館市の長木川河川敷を会場としており、集

客数も1万人前後にとどまっていた。平成24年に天候の影響を受けないドームに会場を移すことでイベント内容や来客数は格段に拡大し、令和元年には3日間で集客数11万5千人を数えるまでになった。したがって、きりたんぼまつりにとってドーム開催を中止することは、まつりの中心部分を失うことに等しいことだった。

### 3 コロナ禍に対応したイベントの開催

きりたんぼまつりを主催する大館食の祭典協議会および本場大館きりたんぼまつり実行委員会は、ドームでの開催を断念する一方で、コンセプトである「文化の継承」を継続していくため、コロナ禍に対応した方法を模索した。そして会期を10月の1か月間に拡大し、ネットの活用など新たな方法を取り入れてきりたんぼまつりを開催した。

その具体的な開催方法は、大きく分けて、第1に、SNSなどインターネットを活用した文化の発信、第2に、「なべっこ」などを通じたきりたんぼ文化の継承にまとめられる。

### 4 インターネットの活用

#### (1) ネットによる文化発信の強化

コロナ禍においては、人的接触を避けるためネットの活用が一層進んでいる。

きりたんぼまつりは、入場者が10万人を超え会場のキャパシティ面で限界に近づいてきたことから、これまでもネットの活用が検討されていた。今回の開催ではコロナ禍でドーム開催を断念したことにより、以下のようにSNS等のネットを活用した発信に大きく舵が切られた。

### (2) たんぼ一万本チャレンジ

これは、ドーム会場への来場者に実際にたんぼを焼いてもらうという従来の体験イベント「たんぼ一万本焼き」を、SNSを活用してネット上で行うものである。

その方法は、①参加者がまず「自分だけの」オリジナルたんぼを作り、②その画像や動画を「#たんぼ一万本チャレンジ」のハッシュタグをつけてSNSやYouTubeに投稿、③実行委員会は、その投稿などに対して賞品を贈るというものである。実行委員会ではイベントを盛り上げるため、兄弟4人の有名YouTuberに依頼して、オリジナルのたんぼを作る様子をアップしてもらう取組みを行った。

### (3) 街歩きデジタルマップの活用

DMO・秋田犬ツーリズムが制作しているネット上の観光マップ「街歩きデジタルマップ」に仮想的なドーム会場内の店舗レイアウトを掲載した。これにより、ドーム会場を訪れているかのような雰囲気を楽しむことができ、通販サイトへのリンクからきりたんぼセットや土産品を購入することも可能となった。

## 5 「なべっこ」による食文化の継承

ネット活用以外では「なべっこ」による食文化の継承に取り組んだ。これは大館市内の小中学校に比内地鶏などの食材を提供し、生徒たちに実際に調理し味わってもらうイベントである。



「なべっこきりたんぼ」比内中学校

地元でも「どうやって作るか知らなかった」という生徒たちも多く、自分たちが作って食べるという満足感が得られたと大きな反響があった。

小中学校以外にも町内会等が行うなべっこへの食材提供、キッチンカーによる出張きりたんぼを実施した。また、過去にグランプリ等を受賞した店による県内各地で本場の味をふるまう取組みも行った。

## 6 コロナ禍におけるICT活用

新型コロナの拡大防止をはかる観点から、人が集まるイベントには大きな制約が課せられているが、ICTを活用することにより今までになかった効果も生まれている。きりたんぼまつりでは、「たんぼ一万本チャレンジ」において応募数10,255本と見事一万本を達成し、SNSを活用することにより新たな形での参加者の広がりを実現することができた。

このようにイベントに関しても、様々な方法を試みることでコロナ禍という災いを転じて福と成す知恵が求められている。

（株式会社あきぎんりサーチ&コンサルティング）  
荒牧 敦郎